

南のひと 07

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



松竹昇助さんと出会ったのは、竹富島 NPO たきどう
ん主催の民具づくり教室を通してだった。今から約
6 年程前に、仲良くしていた友人が「子どもも連れ
て習いにおいで」と声をかけてくれた。

当時 3 歳だった娘の手をひき、毎週土曜日になると
港近くのゆがふ館へ民具づくりを習いに通った。娘
がチョロチョロと動きまわり、半分は作業どころで
はなかったけれど、講師だった富本衛さんや松竹さ
ん、教室に通ってきていた仲間と週一回会い、おしゃ
べりをしながら手を動かすのが楽しかった。年齢も
出身もバラバラだったが、みんな何となく気が合い
一緒にいるとホッとした。何よりも島の素材を使っ
て何かを作り上げていく過程とそれを教えてくれる
松竹さんの存在感を娘にも体感して欲しかった。

松竹さんの作業姿や物を語る仕草は、私が好きな
「島」そのものだ。それは言葉や写真だけでは伝え
きれない事で、同じ時間を共有してこそ分かる事だ
と思う。小学 3 年生になった娘は、お友達と遊ぶほ
うが楽しくなり、民具づくり教室にはこなくなって
しまったが、彼女の記憶のどこかに松竹さんと過
した時間は刻まれている。

松竹さんは、自然と直結しているようなところがあ
る。1 年間を通して、どこかのどの植物をどのように
収穫して作品づくりをするか常に考えている。晴れ
た日は、収穫した植物を太陽の下に干し、雨の日は
屋根の下で作品をつくる、またはその準備をする。
その合間に畑で野菜を育てたり、海からもずくを
とってきたりする。

今では石垣島や小浜島からも熱心に民具づくりを習
いに新しい仲間が通ってきている。その中には、か
つての私のように 3 歳の息子を連れてくるお母さん
もいる。子どもに振り回されあまり作業は進んでい
ないけれど、楽しそうにしている彼女もまた、松竹
さんに魅了されたひとりなのだ。

水野暁子 みずのあきこ

1973 年千葉県に生まれる。1986 年に家族とアメリカへ渡る。1996
年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999 年に竹富島に移住。
現在子育てをしながら撮影活動中。

- 石垣島写真美術館 Mira にて、「南のひと」シリーズより 11 点の作品を展示中。2019 年 1 月 15 日まで。
- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



石垣島離島ターミナル内の七人本舗で働く仲松涼子さんと出会ったのは、今から約9年ほど前だ。当時1歳になろうとしていた娘をベビーカーに乗せて石垣島へ買い物へ出かける度に、涼子さんが働く売店で飲み物やオヤツを買っていた。

娘が1歳半を過ぎた頃、東北の震災が起こり、姉が1歳になる前の息子を連れて2ヶ月間ほど関東から私たちが暮らす竹富島へ避難してきていた。当時、売店で私たち姉妹と子供たちを見かけると笑顔で接客をしてくれた涼子さんは、それから毎年夏休み

に遊びにくる姉と甥を覚えていて「大きくなったね」とか、「今年も来たのね」と声をかけてくれる。娘には、「すっかりお姉ちゃんになったね、カウンターにとどかなかったのにね」などと話しかけながら日々の成長を楽しそうに見守ってくれている。

売店に用事がなくても涼子さんの顔を見に、お店を覗いて行くお客さんや船員さんがいるそう。私もその中のひとりである。そしてカウンターの向こうに涼子さんが見えるとなぜかホッとするのだ。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



属 汐璃（さっか しおり）さんは、小学2年生の夏休みに関東から家族と共に竹富島に移り住んだ。昨年の春、東京の高校へ進学が決まり約8年間暮らした竹富島から旅立って行った。

先日、電話で汐璃さんと話す機会があり、東京での暮らしや学校での話を少し聞かせてもらった。今年の春休みは、カナダへホームステイに行くそう。『カナダへ行くの楽しみです。どんな心境ですか？』と聞くと『最初は言葉が通じないかもしれないと緊張していたけど、今、カナダから来ている子と単語だけでも意外と通じ合えて、結構イケるかも！』と思うようになった』と期待に満ちた楽しい口調で話してくれた。

ツバメは、春になると遠い南の国々から太陽の位置を目印にして方向をさだめ、途中の島々で体を休めながら北へと1日に50km～300kmの距離を飛び続けるという。移動の際は、群れをなして飛び立つが、その後は各個体がそれぞれ自分の判断で単独に目的地を目指すそう。

八重山の中でも竹富町と与那国町には高校がないため、中学校を卒業するとそれぞれの道を選び島から旅立って行く。

ツバメは太陽を目印に飛ぶが、15歳の春を迎えた彼らは、何を目印に飛び立つのだろう。

水野咲子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



新盛勝規さんを初めて見かけたのは、彼が17歳の頃だった。

港から集落へと続く一本道ですれ違った彼は、釣竿を片手にさっそうと自転車を立ち漕ぎしていた。登り坂のため、空を仰ぎ見るような体制で少し笑っているような、満ち足りた表情を浮かべていたのが印象的だった。

撮影の待ち合わせは栈橋に朝の6時、冬の八重山は朝6時でもまだ真っ暗だ。明け方4時から海に潜り魚をついて捕っていた勝規さんに「真っ暗な中、懐中電灯だけで潜るの怖くない？」と聞くと「別に怖くない」と静かに答えた。

東の空が薄っすらと赤く染まりだし、朝一番の光で勝規さんを撮影した。

上手く説明できないが、いらない物は全部海の中で綺麗に落としてきたような、そんな存在に見えた。

「いくつか持ってく？」と言って捕った魚を分けてくれた。

青、緑、橙、黄色とピンクにヌメッと光るイラブチャーは、パラダイス（楽園）そのものだった。

現在、勝規さんは八重山の船会社に就職し、毎日海と向き合いながら働いている。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



國岡玉那さんは、西表島上原出身の小学5年生。
玉那さんのお母さんの恭子さんとは、20年来の
友人で、私が八重山に移り住んだ頃から仲良くして
いる。

恭子さんは石垣島白保でサバニ大工の新城康弘さ
んに弟子入りし、現在は舟大工として独立、家族と
共に西表島で暮らしている。

昨年5月に西表島干立の浜で開催されたウニ
ファー祭りには、國岡家族もそれぞれのチームでサ
バニレースに参戦していた。玉那さんのチームは、
ジュニア第1レースで1位を獲得した。
「チームで声合わせて漕ぎ切ったこと、それが1位

ですごく嬉しかったみたい」と恭子さんが声を弾ま
せながら話してくれた。

ジュニアチームのサバニが浜に到着したと同時
に、メンバーの1人が舟の先端から勢いよく飛び降
りた。全力で走って旗を取りに行く姿には、みじん
の迷いもなく、見ていて爽快な気分になった。

まるで、海も空も風もサバニも、砂をけて走る
ことも、勝ち取ることも全てが1つになってただそ
こに在る、そんな風に感じた。

あの瞬間をひと言で綴れるなら、「あこがれ」。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996
年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。
現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



半嶺まどかさんの父親は石垣島出身、母親は沖縄本島出身だ。石垣島で生まれたまどかさんは、幼いころに沖縄本島の与那原町へ引っ越し、沖縄本島で育った。

石垣島宮良の祭りや行事に参加する父親に連れられて、まどかさんも小さなころから幾度も石垣島へ通った。父親の奏でる八重山民謡は沖縄での暮らしの中で常に八重山を身近に感じさせる役割を果たしていた。

まどかさんは、現在フィンランドのラップランド大学に籍をおき、社会言語学と教育学の分野で博士号を取得するため、世界中の様々な場所に滞在しながら論文を書いている。

沖縄から離れて自分のルーツを客観視する機会を得てから、いくつかの疑問や感情がフツフツとわいてきたそうだ。たとえば、琉球列島出身なのに、なぜ生まれ育った島のことばが分からないのか。なぜ島のことばを話すには、社会的なバリアのようなものがあるのか。大学へ進学する際には、日本語と英語と他にも外国語を学ぶが、島のことばは話す機会が少なく、話せば何となく「きたない」と思われているように感じた。観光客向けに、しまくとうばやシمامニ（琉球の島々のことば）を使った商品が並ぶ空港にいと、売り物にされているかのような違和感を覚えた。

そしてそれは悲しいことだと感じたそうだ。そのことがきっかけで、まどかさんは宮良のことばを勉強し、今では祖母と宮良のことばで会話ができるようになった。

現在、論文を書くかたわら独自の方法で、宮良のことばの復旧活動につとめている。

ゆっくりと丁寧に話すまどかさんの口調からは、話す内容もそうだが、一つ一つのことばに敬意を払っているように感じた。

世界中を飛び回りながらも八重山に舞い戻るまどかさんの体内には、彼女独自の地図が存在していて、心の中にある羅針盤をたよりに突き動かされているかのようにみえる。

ライフワークになるであろう彼女の宮良ことばと文化の継承作業。私は、渡り鳥が舞い戻ってくるのを楽しみに待つように、彼女がふわりと八重山に舞い戻る日々を見守っていこうと思う。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



いつも虎のシャツを着ている前本賢二郎さんは、
手先が器用で木工細工が得意な島の大工さんだ。

「何故いつも虎のシャツを着ているの？」と聞いたら、
「僕は、虎が好きなんだよ。何でも分からないけど
小さい頃からね」と答えた。

賢二郎さんは、元気溢れる双子のお父さんだ。
やんちゃな双子たちが小学校へ上がる前は、賢二郎
さんが庭で作業をしている周りをチョロチョロとか

けまわって遊んでいた。まるでお父さん虎の周りを
じゃれ合いながら遊ぶ子虎たちのように。

「こら～！ やかましい！ 静かにしなさい！」と叱る
賢二郎さんの声は「ガオ～！ グルルル～」と吠える
お父さん虎のようだった。

もし賢二郎さんが虎だったなら、
特徴：体は大きく強面だが根はやさしく繊細なところ
のある虎。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996
年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。
現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島、願結祭の楽屋裏で当時9歳の上勢頭舞音さんを撮影させてもらった。

初舞台で少し緊張した表情と舞台メイクで大人びて見える彼女の夢は、パリでデザインの勉強をして、島でお店を開く事だと教えてくれた。あれから2年の時が経ち、先日改めて今の夢を聞いてみた。

「パリに行くかは分からないけれど、デザイナーにはなりたい」と彼女の夢は健在だった。そんな彼女に、「竹富島のどんなところが好きですか？」と質問してみた。

「学校！ 竹富小中学校は少人数だからみんなお互いを知っていて仲良し。地域の人たちも私たちのことを知っていて、安心感があるところが好き。アカショウビンが自由に飛べる自然、夜が静かなところも好き！」

彼女がいつか大人になり、デザイナーとしてイメージをたぐり寄せる作業と向き合う時、これらの記憶は彼女の作品にどのような影響を与えるのだろう？ 真っ赤なアカショウビンがシューっと風をきって自由に飛びまわる島。真っ暗な夜の静けさの中、安堵感に包まれて静かに眠りにつく彼女のみる夢は、きっと素敵だ。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島出身の野原駆君は、小学5年生の時に種子取祭で笛奏者としてデビューして以来、祭りの舞台裏で地唄として活動している。この写真は中学2年生の時に演目の合間に楽屋裏で撮影させてもらった。

駆君にデビュー当時の心境を聞いてみた。

「めちゃめちゃ緊張したのは覚えています。初めての種子取祭で、ミスができないと思えばおもうほど体がガチガチになりました。踊りが始まり笛を吹き始めたらとても楽しくて、父も横にいたこともあって落ち着いて吹くことができました」

駆君の父親も唄三線を演奏する島の地唄だ。

駆君に、2つ質問をしてみた。

1つ目の質問は、「笛奏者としての心得みたいなものはありますか？」

「とりあえず楽しむということです。緊張したら、息が続かなくなるので、リラックスするように心がけています」

2つ目の質問は、「地唄は幕の裏側で演奏するため、観客からは顔が見えない存在です。このことについてどう思いますか？」

「舞台裏なのはとてもいいと思います。さっきの話と繋がるのですが、リラックスできるからです。また、メインは踊りだという気持ちでいるので、地唄が見えるところにいると、お互いの良いところを打ち消し合ってしまうし、表から見えない幕裏でやることに意味を感じています」

今年「15の春」を迎えた駆君は、竹富島を離れて現在石垣島の八重山高等学校に通っている。

「今年の種子取祭にも笛を吹きに来ますか？」と聞くと、「行きます！」という答えがかえってきた。この即答のストレートさに、聞いたこちらの背筋がスッと伸びた。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



前盛五希くんは、登野城出身のお父さんと、香港出身のお母さんをもつ小学4年生だ。

動物好きな母親の影響で、赤ちゃんの頃から様々な生き物に囲まれて育った。

昨年、育児放棄をしてしまった母親ヤギの赤ちゃんを前盛家で引きとり育て始めた。五希くんが哺乳瓶で赤ちゃんヤギにミルクを飲ませ、お世話をしている姿が印象的だった。

ユキちゃんと名付けられたその子ヤギは、まるで甘えん坊の弟のように五希くんのあとをピョンピョンと跳ねながらついてまわっていた。

この夏、娘を連れて五希くんのお母さんがコツコツと作り上げている小さなヤギ牧場へ遊びに行った。動物好きな娘は、目の色を変えて五希くんと一緒に敷地内を散策していた。

林の近くの一角には、自宅でヒナから育てたという鶏たちが自由に歩き回っていた。

「この子、いっちゃん。僕とおんなじ名前」と五希くんが一羽の鶏を抱きかかえた。

鶏を腕の中にすくと佇む姿には、不思議な安心感を覚えた。

学校から持ち帰るランドセルも筆箱も空のことが度々あるとお母さんばボヤいていたが、様々な生き物に興味を持ち密接な関係を築くことができる五希くんには、ある種の希望を感じる。

あの日、鶏を抱きかかえた五希くんからは、「大丈夫だよ」というメッセージを送られているようだった。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

● ART HOTEL 石垣島にてアートブック & フォト展「南の人」開催 2019年10月31日～11月25日。

● 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 17

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

中村鼓さんとの出会いは、今から約10年ほど前、鼓さんが小学3年生の頃だった。

当時は、鼓さんのご両親が営む中村雑貨さんにちよくちよく出向いては、鼓さんのお母さんやお父さんと世間話をしたり、商品を眺めたりしていた。お店の奥には子供達のためのスペースが設けてあり、小さな姉弟はいつもそこで遊んでいた。

鼓さんが中学生の頃は、部活や学校の都合でお店から離れていたけれど、高校生になってからは活動の場が広がり、再びお店のある商店街をおとづれるようになったという。そして気づいたのは、小さい頃に通ったこの界限は、どこを歩いていても近所のおばあさんや商店の人たちが気さくに声をかけてくれるアットホームな場所であるということ。今はそれがとても嬉しいのだと話してくれた。

鼓さんに小さい頃と今ではどのように変わったと思いますか？と聞いてみた。

「あの頃は、自分は最強だと思っていました」と笑いながら答えた。

「今は、あの頃よりずっと丸くなったと思う。すごい人がいっぱいいることに気づいたというか。中学校で、色々な人間関係にぶつかったり、悩んだりしたことも影響していると思うけど、今の高校に入って発展クラスで出会ったクラスメイトたちの影響が一番大きいと思う。すごい趣味を持っている人や、とにかく自分を持っている人が多い。高校に入学してすぐの頃の国語の授業で自分の好きなことを話す時間があり、周りの目を気にせず自分の好きな作家のことを熱く語っている子がいて、良いなと思った。人のことを気にしなくて良いんだって素直に思えるようになったのは、その時からですね」

鼓さんは現在美術を学ぶため、沖縄本島の大学を目指して日々頑張っている。

「小さい頃の最強だった自分も好きだし、今の自分も好き」と言っていたのが印象的だった。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。